

国土交通大臣賞（優秀賞）

源流の里から未来をつくる

豊かな森につつまれている小菅村。七三〇人と人口は少ないが、村の人たちは皆家族のように過ごしている。ガラスのようにすきとおっている多摩川の源流、小菅川が村の自慢だ。そんな美しい小菅川で育てられたのは、緑があざやかで新鮮なワサビ、そして活きのいいヤマメ。小菅村では、自然そのものを生かした特産物が生産されている。

五年生の時、初めてお刺身を口にしたのはヤマメだった。歯ざわりがよく、かみしめるたびにヤマメのおいしさが口に広がった。ヤマメのとなりにあったのは、みずみずしいワサビ。ヤマメといっしょに口の中に入るとワサビのピリツとした辛さに目を見開くほど驚いた。このヤマメのコリコリとした食感とワサビのピリツとした辛さには、どんな秘密が隠されているのか気になった。村の大人にどうして小菅村の特産物が新鮮なのか質問してみると、「小菅の水がきれいだから、おいしいから新鮮なものが食べられるんだよ。」と答えてくれた。その時、私は確かワサビは水のきれいな所で作らないと元気に育たないということを出した。小菅村のきれいな水があるからこそ、おいしくて新鮮な特産物が食べられるのだ。

小菅村は、下水道処理人口普及率が百パーセントを達成している。平成二十七年末の国内の下水道処理人口普及率は七七・八パーセントであり、地方ではまだ下水道が整備されていないところもある。人口七三〇人の村で百パーセントというのは驚異的な数字といえる。これは村の人々の「小菅の川をよごしたくない」、「このきれいな小菅川を維持していきたい」という思いがあるからこそだ。また、村にはこんな言葉がある。「シモノシには迷惑をかけられない。」この言葉は、「下流の人には迷惑をかけられない」という意味であり、村の人たちの志でもある。下流の人のことを考えて自然を守ることは、村の住人にとってあたり前のことなのだ。私も小さい頃から村の大人と一緒に、川の清掃活動に参加し、

山梨県 小菅村立小菅中学校 一年 古谷 梨那

「ここは東京都の大切な水がめだ」と教えられてきた。私の母は東京の出身であり、まさに「シモノシ」だ。このつながりに気が付いたとき、村の人たちへの感謝が自然と湧いてきた。

小さな村でも、一人一人の気持ちがあわされば、きつといい環境をつくっていく。村の環境や特産物を守ることは、村の生活を守ることだけではなく下流の人たちの生活も守っている。私も自分のことだけではなく、もっと広い視野でものごとを考えたい。将来、自分に子どもができたとき、お風呂や水道の水が汚れていたら生活していく上で望ましい環境とは言えない。水は人の生活を守ることだけではなく、命をつないでいるということを忘れずにいることが大切ではないだろうか。「下流の人」だけではなく、下の世代にも迷惑はかけられない。